

主体的に話す

——意見を持つ生徒の育成をめざして——

松浦 弘幹

今回報告するものは、主体的人間の育成、特に自分の意見を持つ主体を育てることをめざして、「話すこと」を取り入れて行った実践である。「話すこと」は、実生活の言語生活の状況において最も機会が多い。また現在の国語教育の中で軽視されがちである。その「話すこと」に関する活動、「自由題スピーチ」・「意見発表スピーチ」・「弁論大会」・「パネルディスカッション」といったことを系統的に学習の中に取り入れた。

1. はじめに

最近、自らすすんで行動をしようとしなない生徒が多くなってきた。それは改めて言わなくとも、「指示待ち人間の増加」などの表現で、すでに多くの人々が指摘している。しかし私はまた、行動的ではあっても、思慮のない生徒も著しく増えているように感じる。

他人に批判されることだとは自分では思わず、何の気なしに行動する。そうしたことは、これまでも善悪についての判断力の低下として問題にされてきた。しかし最近の生徒には、善悪の判断することに意識をむけないという性質が見られるように思われる。例えば、ある行動に対してしかったとする。そのときの注意を実に素直に聞く。演技なのかかもしれないが、実に神妙な顔で怒られる。本当に反省しているように感じられるのである。しかし、同じことを何回も繰り返し、同じように注意されるのである。そのような生徒に対してどう取り組んでいけばよいのか。

2. 主体性を育てる指導について

先に例示したような生徒は「主体性」がないと言うこともできる。私たちは彼らの主体性を培わなければならない。「主体性」について、私は「主体に根ざし、主体の内部から外部へ積極的に向かっていく力」と理解している。このように主体性とは漠然としたものである。であるから主体性を育てる学習を展開しようとする場合、授業者はできるだけ具体的に目標をしぼっておかねばならない。私が今回展開した授業での目標は、「自分の意見を持つこと」である。

判断、思考をすることを避けがちな生徒には、彼らなりの意見をできるだけ問うていくことが重要である。すなわち、自己をとりまく社会に目を向け、自己の持つ価値基準をあらためて明確にするような機会を保証していくことである。その繰り返して、自らの内から出た問題意識、意見を持つようになれば、それは彼らの日常の生活に影響が及んでくるに違いない。そこで私は次の2点に留意して主体性の育成に取り組んだ。

◎身の回りの問題、社会的な問題について自らの立場から考えさせる。

◎他人、社会のなかでの自分の存在に気づかせる。

さて、「意見を持つ」主体を育てるためにどのような指導方法が取り入れられるべきであろうか。

まず考えられるのが「書くこと」である。それは「意見文の指導」という形で、すでに国語科指導に定着している。だが、「書くこと」だけで十分であろうか。単純に結びつけるのは危険だが、彼らの日常生活において、書いて主張するよりも、話をする事、特に小人数を相手にした「対話」の中で自己の意見を主張することのほうがはるかに多いのではなかろうか。とすれば、「話すこと」を学習指導にもりこむことが必然になる。「話すこと」は、「意見を言う」主体の育成という指導過程のなかで、何より重視されるべき指導項目なのである。

3. 単元計画

一. 単元

○主体的に話す・書く

二. 単元のねらい

- (1) 自分の意見を的確に表現する力を養う。
- (2) 社会に目を向け、自分の意見を持つ主体を育てる。

三. 単元計画の全体像

※対象学年：中学3年間。

※使用教材：

- ・「よい聞き手になるために」（学校図書『中学校 国語1』P. 8～10：表中注1）
- ・「よりよく話すには」（学校図書『中学校 国語2』P. 7～10：表中注2）
- ・「調査して書く」（学校図書『中学校 国語2』P. 58～71：表中注3）
- ・「意見を書く」（学校図書『中学校 国語3』P. 52～67：表中注4）

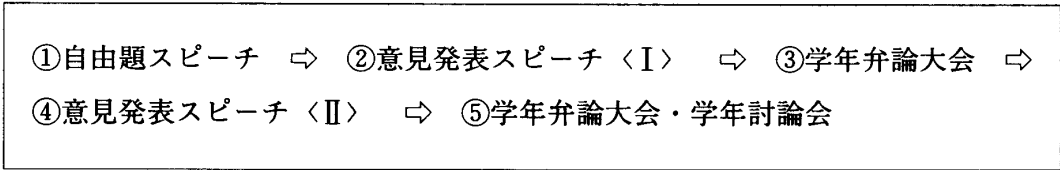
※表中の記号「◎」は柱となる学習、「○」は付随的な学習であることを示す。

実施時期	聞 く	話 す	書 く
一年2学期	◎聞き取りの練習 ◎メモの練習（注1）		
二・2	◎聞き取りの練習		
二・1～3	○批評するために聞く	◎自由題スピーチ（注2）	
二・3 春休み	○たずねた答えを聞く	○人にたずねる ○敬語の学習	◎調査して書く（注3）
三・1		◎意見発表スピーチ〈I〉	○意見文を書く（注4）
三・1	○たずねた答えを聞く	○人にたずねる	○修学旅行事前学習資料
三・1	○審査するために聞く	◎学年弁論大会	
三・夏休み			◎課題作文
三・2～	○意見を理解するために聞く	◎意見発表スピーチ〈II〉 ◎学年弁論大会 ◎パネルディスカッション	

4. 主体的に話す

- (1) 「話すこと」を中心に据えた学習

前表で示した通り、「話すこと」が中心の学習の流れは次のとおりである。



以下、ねらいと方法、その実際を説明する。

①自由題スピーチ

(指導目標) ◎話すことに慣れさせる。

◎わかりやすく何かを伝える「話し方」を理解させる。

「話すこと」の学習の導入として、教科書に掲載されている教材「よりよく話すには」を学習した。それをふまえて次の点を指示して、スピーチを計画した。

◎スピーチをする際の注意

- (ア) 授業ごとに1～3人が行う
- (イ) 題材は自由
- (ウ) 時間は2分以上3分以内
- (エ) できるだけ文章化した原稿でなくメモを用意する

◆まず、話すのに慣れさせることである。そこで(イ)、(ウ)としたが、2分以上という制約をもうけたのは、ただ前に出て何かたわいもないことをしゃべる、といったことを防ぐためである。2分というのは、結構長いものである。話としてある程度のまとまりがないと2分以上は話すことができない。生徒もうまく話すことの困難さを実感していたようである。

(イ) 題材に限らず、形態についてもかなり許容した。人前で話すことに慣れさせることを第一のねらいとしたため、漫才、怪談なども認めた。題材としては「生活文」の発表といったものがほとんどであった。クラブ活動について、楽しかった思い出、自分の町の紹介などが多く、このときに自分の意見、問題意識を発表したのは、125人中20人程度である。

(エ) スピーチの指導において特に重要な点であろう。原稿を読むというのは「話すこと」の指導にはならない。ただ、生徒の実情に応じて、原稿を持ったままのスピーチも許可した。

◆スピーチを聞く立場の生徒達には、教科書を用いて、「話し方」を評価させた。(資料A参照)

(資料A)

	スピーチ批評用紙 2年()組()番() 月 日 曜 スピーチ者名							
このスピーチで本人が伝えなかつたことは、 ということだつたんだろうと思います。	このスピーチに題名を つけるとすれば、 このスピーチのなかで	このスピーチで工夫していた所 の所がおもしろいと思いました。	その他見られた工夫	「話し方」で今後特に、注意すればよい所(Ⅰ～Ⅲ) このスピーチを聞いて、自分がスピーチをする場合に見習おう、 特に気をつけようと思ったこと				

なのである。そこで必ずメモを用意させて、わかりやすいスピーチを心がけさせた。

また用意するメモを作成する際に、必然的に文章のまとまり、構成を考えることになる。そこに論理的思考力の発達を期待した。

◆（オ）生徒にプリントを配布して、意見スピーチでの留意点を確認させた。2年で学習した話し方の観点をもとに授業者がポイントをしぼり提示した。（資料C参照）

項目として「内容」と「話し方」に分けたが、「文構成での工夫」と、「話し手の態度のありかた」と読みかえてもらえればよい。つまりどちらも「話し方」に関する注意である。前項（イ）で述べた「自分にひきつけてその問題を考えているか」ということは感じとっていくしかない。そこで「その他」という項目をたて、その説明として自分のことばで話すことの重要性を述べるにとどめた。（資料C）

『意見を言う』スピーチで特に気をつける所（採点基準）

《内容について》

- ・出だしが工夫されているか。
- ・構成がよくできているか。
- ・要点がよくわかったか。
- ・適当な具体例が示されていたか。
- ・その他

《話し方について》

- ・適当な間（区切り）を取っていたか。
- ・顔をみんなの方に向けていたか。
- ・早口にならず、声は大きく、発音は明瞭であったか。
- ・時間（2分以上3分以内）が守られているか。
- ・その他

◎以上の項目で、それぞれ「0点」～「2点」をつけ、20点満点で評価します。

◎皆さんもこの項目にそって点をつけ、最後のクラス代表の選出に利用してください。

③学年弁論大会

（指導目標）◎自己の意見を持つ友人の姿勢に触れさせることで、意見を持つ主体を育てる。

◎友人のすぐれたスピーチから、「話し方」のよい点を学ばせる。

◎多くの人に向かって話すことのたのしさに気づかせる。

（資料C）にあるように、意見スピーチを行う当初に、学期の最後にクラス代表による弁論大会を実施することを予告しておいた。「弁論大会」に代表として選出される生徒のスピーチはやはり優れている。そうした優秀なスピーチを聞かせることで、他の生徒が啓発されればと考えた。

まず何よりも、社会的問題を自分の問題としてとらえている生徒の態度に触れさせることが、意見を持たない自分を振り返る契機になればよい。また当然、優れた「話し方」も感得するであろう。そしてそれは「自分もこのように話せるようになりたい」という意欲にもつながっていきはしないか。少なくとも安易にスピーチを終わらせようとするのがなくなっていく。また啓発を促すために、あらためて会場を設営し、司会者、審査員を用意するなど、会の雰囲気ができるだけ厳かなものになるようにもした。そうした日ごろの授業とは異なった雰囲気、選ばれた者がよりうれしさを、誇りを感じるようになってくれるであろうし、また他の生徒のその後の学習意欲を高めることにつ

ながっていくように思う。

さて、その実施において、特に留意した点を次に述べる。

◆「発表形式」、「発表内容」について

発表者にとっては、ずいぶん前に考えて、一度述べたことを再び発表することになる。そのため発表者の中では新鮮さは多少失われているであろう。その気持ちのままに発表をさせれば、話し手から乖離したことばを用いかねない。先のねらいのためにもそれはできるだけ避けなければならない。そこで、発表者が大会の直前にその問題をあらためて考えるようにと、制限時間を1分長くし「3分以上4分以内」とした。

また、新たな問題について意見を述べてもよいこととした。彼らがどのような問題についてであろうと、心に入ったスピーチをしてくれるであろう、と判断し得る生徒であるからである。実際には、授業で述べた意見がその後揺らぎ、結論がつかないので内容を変えたいという生徒がおり、新たな話題で出場させた。

またここでもメモを使用することを条件とした。

◆「クラス代表選出」について

クラス代表は（資料D）のような用紙を用いて学期末に行った。その場合、発表後かなり時間が経過したものに対しては、なかなか正しい判断ができにくいであろうことを考慮し、スピーチ後に意見文としてまとめ直させたものを、選考の際に配布した。それを読むことで過去のスピーチはかなり正確によみがえるのではないかと考えた。

（資料D）

記録性が弱い「話しことば」を中心に長期的に学習をすすめていく際には、何かしらその点を補う工夫をしておかないと、そこで指導が形がい化してしまう危険性がある。そういう際に特に「書くこと」を密接にからめていくことが大事なことであろう。今回スピーチ後に文章にまとめ直させたのは、本来意見文を書く指導として組み入れたものであるが、ここでは「話すこと」のために利用した。

氏名	題名
坂田	殺されていく動物について
橋本純	湾岸戦争での日本がお金で国際貢献したということについての意見
栗原	男女の平等について
柳原	食品添加物について
北川	高齢化社会へ向けて
山形	ゴミについて
亀川	名言について
山本修	本来の社会のあり方
金野	オゾン層について
吉岡	森林の破壊からくる環境破壊について
宇田	リサイクルについて
吉田	公共物を大切に
井口	地球の温暖化について

3年 弁論大会 クラス代表選出用紙
 ☆最も良いと思ったスピーチに「○」、次に良いと思ったスピーチに「△」を付
 けなさい。
 「○」が二つでもよろしい。

④意見発表スピーチ〈Ⅱ〉・⑤学年弁論大会・討論会

（指導目標）◎意見を積極的に発表できる主体を育てる。

◎自らが意見を持つために、話を正確に聞きとる力を培う。

ここでは特によりよい聞き手を育てることを意識している。「聞くこと」に関しては後の項で触れたい。今は指導計画を簡単に示し、「話すこと」に関することのみ述べるにとどめる。

一学期から続けて意見発表スピーチを行う。スピーチの方法自体は、スピーチ〈Ⅰ〉と変わり

ない。しかし、スピーチの後に、質疑の時間を設けた。ポイントを以下に掲げる。

- (ア) 出席番号順に4人グループを構成する。(10グループ)
- (イ) プリントに従いながら、発表に対する反論、もしくは質問をグループ内で討議し、まとめる。
- (ウ) 質疑・反論の時間に班長が代表で挙手し、発言する。
- (エ) 質疑・反論の時間内に発表したグループは、プリント後半部分を完成させなくてもよいものとする。
- (オ) 質疑・反論の時間内に発表できなかったグループは、次時までにはプリントを完成させて提出する。
- (カ) 2グループ目以降の発言は、前のグループの発言内容に関連のあるものを優先する。
- (キ) 質問の対応の仕方によっては、次時の同じ発表者が発表を行うこともあり得る。
- (ク) 司会は教師が行う。

◆ (ウ) 中学三年ともなると、教師の質問に対し挙手し答えるということは、まずしない。それが一般的な発達の段階であると認識し、できる範囲で積極的に発言する機会を保証しようと試みた。そこで、(エ)、(オ)のような約束をして学習を行った。これはただ安易な方向に流されやすい生徒の心理によりかかった方策でしかないのだが、なりよりも積極的に発言することを経験させたかったわけである。また10グループすべてが発言する時間はないので、われ先にと手を挙げる。それによっておきる授業の活気も期待した。

ところで、これまでの多くの指導例にもスピーチ後の質問の時間というものは保証されているようであるが、その質問はどれだけ核心をついているのかといった質のことまであまり重視されてきていないように思う。一時間の授業のうち数分を費やす形で「話すこと」の学習を組織した場合、質問内容の質を高めるために多くの時間をかけることは許されない。一時間かけて質問のあり方を学習するのは効果的であるが、それを何時間もするわけにはいかない。帯单元の中で質を向上させる指導法の研究が今後もっとなされていく必要がある。

◆ (キ) 挙手が発表者にプレッシャーを与えるのではないかと考えた。練られた質問がされるわけであるから、いいかげんな発表はできない。自分なりにその問題をよく理解しておかないと質問には答えられない。その意識変革がよりよい話し手を育てることにつながる。

その後、一学期と同様に弁論大会を行うが、三学期末には討論会を行う。「意見を持つ主体の育成」のひと区切りとして次のような観点で行う予定である。

- (ア) 形態はパネルディスカッションを行う。
- (イ) 全スピーチの中から、共通した題材で行った数人をパネラーとする。

(2) 「書くこと」の学習に付随した「話すこと」の学習

「話すこと」は、実際の言語生活の中では中心をなすものである。「話すこと」を指導する場合、常に実生活に生きる力として育てることがめざされなくてはならない。

- ①「調査して書く」・②「修学旅行事前学習資料作成」

二つの活動とも、書く力を育てる学習である。しかし、書くための取材の段階で、公的な場面で話すことをできるだけ経験させるよう仕向けた。これは「話すこと」の指導として意識して行ったものである。

具体的には、①、②の学習ともに、知りたいことを人にたずねるように指示したわけだが、実際には生徒達は、親、祖父母に始まり、学校や塾の教師、町の観光課の人、駅員など活動的に取材を行ったようである。

また、そうした実の場での活動を生かしながら、敬語の学習を行った。

5. 主体的に聞く

「聞くこと」は、「話すこと」と密接にかかわっている。そして「話しことば」の指導の場合、まず良い聞き手を育てることが望まれる。自身が良い聞き手であって初めて聞き手を意識した話をするができる。とはいえ本単元では、「話しことば」指導の導入としてほどの聞き手の育成は行っていない。ただ、今回は、「意見を持つ主体になるための聞き手の育成」をねらい、その点にしまって「聞くこと」の指導を考えた。

よい聞き手として静かに耳を傾けることが、よく評価の観点になる。今回の場合、静かに聞くことは早い時期に達成されていた。しかし、ただ静かにしているだけでは意味がない。スピーチのどの点が核心であり、どの点が発表者と異なるのか、などといったことをその場、その時に考えているような主体が望まれるのである。そうして「聞くこと」から主体性を育てていくことで、意見を持つことがますます習慣化されてくるのではないか。

6. 主体的に書く

「主体性を育てる」ためには、「書くこと」はやはり不可欠である。本単元でも「話すこと」と同じ比重で「書くこと」を取り入れた。特に「書くこと」によって主体性をのばそうとした活動は、次の二つである。

①「調査して書く」・②「課題作文」

◆①「調査して書く」は、あらためて社会や身の回りの生活に目を向けさせるための指導である。書かせるときには次のようなことを注意した。

◎調査して書く際の注意

(ア) 文章中で、二回以上問題を設定する。

(イ) 書物から調べたことを文章中で引用する。

(ウ) 文章の書き方は教科書の文章を参考にする。まねてもよい。

その後、「自己評価」、「他の文章の評価」、「友達の文章から学ぶ点」をまとめさせた。

◆また、②「課題作文」として、一学期中に学校に送付されてきた各種コンクールの案内をできるだけ生徒に提示して、論文を書く機会を設けた。

これまでの学習の成果で視野が広がった生徒に対して、自らが思うことを書く機会を保証した。そしてまた、いまだ社会に対して目を向けることが苦手な生徒に対して、具体的に題材を指定する

ことで書きやすいようにした。

7. まとめ

以上の実践を、まず「話すこと」の指導の点から整理しておきたい。

日常での言語生活の中で最も多く行われる言語活動が「話すこと」である。「話すこと」の種類の分類方法にはさまざまあるが、例えば村松賢一氏の「パブリックスピーキング」の分類を参考にすると、「話すこと」は相手に何かを伝えたい場合がほとんどである、ということにあらためて気づく。そういう点でスピーチの指導は有効性をもったものであると言える。しかし現在のスピーチによる指導というものには、わりに言いっぱなしの指導が多いように思われる。もしくはあまりに「話す技術指導」に傾く場合もある。また、実際の社会生活を考えた場合、多数の人数に対して話をする機会がどれだけあろうか。このことから、次の点が重要となる。

◎スピーチを取り入れた指導では、スピーチ技術の育成を第一のねらいとしない。

では、スピーチを取り入れることで何を育てていけばよいのか。

実生活の「話すこと」の中で、最も機会が多く、そして重要なのは「対話」である。一対一で行われる「対話」においては相手意識が特に必要とされる。「話すこと」の指導として重要なことは話す目的・場・相手を意識して話すくせをつけさせることであることはすでによく主張されているが、その中でも、特に相手を意識して話をするのが重要であると考えられる。そしてそこに、相手を意識して聞くことの重要性も関連してくる。国語の授業において、「話すこと」の指導をつきつめて考えると、「いかによく問題の本質をとらえることができるか」という指導の問題になる。そしてそれは「話すこと」にとどまらず、「いかに問題の本質を聞き取ることができるか」という問題に、すなわち「聞く」という受け取り手の方の問題になっていくのである。このことから、「話すこと」の指導は、相手を意識して話し、聞くような「対話」のできる主体の育成につながらなければならないと言えるだろう。

「話すこと」の指導の前に十分な「聞くこと」の指導を行うことの重要性が指摘されていることはすでに述べたが、その場合の「聞くこと」の指導はどちらかといえば「聞く技術」の問題としてとらえられているように思われる。本来受け身となる「聞くこと」の指導を充実させ、主体的な「聞き手」を育てるためには、十分な「話すこと」の指導がなされることが必然であるように思われる。

8. 反省と今後の課題

今回の単元での「話すこと」に関して振り返ると、

- ①話すことに慣れさせる
- ②話すために自分の意見をまとめる
- ③わかりやすく上手に話す
- ④意見を持つために人の話を聞く

という流れで展開され、そして直接的には③でしか「話すこと」の充実を目指していない。もとも

と「話しことば」指導単元ではないので、このようなことになったとも言えるのであるが、実際に授業を行ってみて「話すこと」が主目標、また時には副目標として取り上げられるという形のほうが楽しく「話すこと」を学習できるような感想を持った。さまざまな言語活動が行われる中で「話す」という活動を保証することが、より生き生きと「話すこと」につながるのではないだろうか。今後「話すこと」、特に「対話」を中心にした単元を考えていきたい。

次に「主体性を育てる」という点とかかわらせて「話すこと」をまとめておきたい。

「主体的に話す」とはすなわち「自分のことばで話す」と言い換えられる。それは、ある問題をどれだけ切実に考えているかということである。それは結局自分自身に帰着する問題であるので、指導の基本としては、できるだけ社会、身の回りに目を向けさせることしかないように思われる。よく作文指導で書く題材を与えることが有効であるといわれる。「主体的に話す」指導の場合であれば、「社会問題に関しての、より具体的な題材集」を与えるということになる。しかし、いつもそれでは真の主体性は育たない。やはり、自分自身で視野を広げさせるようにしむけていかなければならないのである。

とはいえ、新たに社会に目を向けることはそうたやすいことではない。批判的とはいかなくても、少なくとも疑問をもつ主体であってほしいと願う。漫然と日常を生きる主体であってはならないはずである。

もっともな意見を言うこと自体は、実はそれほど困難なことではない。テレビのニュースキャスターが言っていることを、まねすればよいだけである。実際その点を留意しておかないと、立派な意見を述べる生徒の真の姿を見誤ることになっていくであろう。その意見が自らの内から発せられたものであるか、どれだけ自己を反映したものなのか、という見極めがかなり重要になる。生徒が発表した立派な意見に対して、安易な評価をすべきではない。ただし、ではどのようにそれを判断すればよいのかということになると、理屈では説明できないところに達してしまうので、なかなか明確にできない。今後の課題である。

▽主要参考文献

- ・『教育学講座 8 国語教育の理論と実践』学研
- ・『大村はま国語教室 第2巻』大村はま、筑摩書房
- ・『国語科教育 第三十八集』全国大学国語教育学会編
- ・『話しことば学習論』野地潤家、共文社
- ・『国語科教育論』中本環・足立悦男編、東信堂
- ・『日本語音声表現の要点』NHK放送研修センター 日本語センター